

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話(03)33377146 49 FAX(03)32999153 367

振替 〓〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 〓中央労金本店 No.1154163

購読料 〓月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

原子力マフィア 独占資本孤立化の闘い

原野人……………2

一年を迎えた福島原発 メルトスルーと原子力資本

東海第二原発廃炉めざして

川野 弘子……………5

―「3・11」から一年のたたかい―

沖縄でも「3・11」にシンポ

毛利 孝雄……………8

―オキナワだより ⑤―

賞味期限切れはごく間近

……………10

―橋下君と日本政治(二)―

国鉄闘争総括の視点求めて

赤峰 正俊……………11

―新潟・山形「奥の細道」の旅①―

◇投稿 ◇ 反原発活動家・芳川廣一さん逝く

小林 義昭……………13

読者からのおたより……………14

旬刊 社会通信

NO. 1116

二〇二二年三月一五日号

二〇二二年三月一五日発行
(毎月二日・一五日二回発行)

原子力マファイア 独占資本孤立化の闘い

— 一年を迎えた福島原発 メルトスルーと原子力資本 —

「冷温停止のウン」 どじょう首相は、昨年一二月に「事故収束宣言」を発した。「冷温停止状態」に至ったという。ひげで泥の温度をみて、地下マグマの状態が分かるのだろうか。

東電の推定では、一号機では核燃料のすべてが溶融して圧力容器（原子炉本体）から格納容器に落ち、容器床面のコンクリートを最大六五センチメートル溶かしている。格納容器内にとどまっているが、外殻の鋼板まであと三七センチに迫っているという。二、三号機でも半分以上の核燃料が溶けて格納容器に落ち、床面のコンクリートをかなり侵食しているらしい。

この侵食が止まったという保証はない。仮に上面は水で冷やされていても、コンクリートを侵食している部分はどうなっているのか。その温度を測定することさえ不可能だ。一月一九日には、高被曝作業で、二号機格納容器に内視鏡を入れてはみたが、立ち込める水蒸気で、燃料部分はおろか水面さえ見られない。

まだ臨界や水素爆発の恐れも消えていない。大きな地震で冷却が失われることもありうる。四号機では使用済み核燃料を沈めたプールの水さえ不安定だ。

一、二、三号機を外周から遮断すること、早急に周囲から、地下水の流入や循環水の流出がないように地中から遮断壁で囲むべきことは、かねて識者もわれわれも主張してきたことだ。さもないと、汚染処理水がどんどん増えて、貯蔵能力を超えそうである。格納容器の底部も、下から十分な耐食・耐熱・耐震性の素材で遮断すべきである。

「廃炉にする」とは、「三〇年以上もかけて、溶けた核燃料まで取り出し、炉や格納容器を解体撤去すること」ではない。解体作業は多くの被曝労働者を生み、放射能を拡散させる。解体しても、敷地外に高レベル廃棄物の処分場などありはしない。

増え続ける汚染 陸に海に 大気中に 毎日五百トンの地下水が第一原発の建屋に流れ込んでいる。浄化处理せねばならない高濃度汚染水はそれだけ増える。日に千トンのペースでこれを浄化处理している。うち五百トンを原子炉の冷却水として再利用し、残る五百トンは余剰となり、タンクに保管している。保管タンクは増設分も含めて一七万トン程度だが、まもなく満杯になり、地下に防水シートを張ったため池を作るという。これではいずれ海に漏れ出す。

NHKが専門家と協力して調査したところ、すでに近海の漁場でとれる各種の魚は、放射性セシウム等で相当に汚染されている。暫定基準値より高いものが多いから、四月から適用される基準値よりはるかに高いことになる。泥の中の放射能は、ゴカイが摂取し、それをヒラメ、アイナメ、ホウボウ等の底魚が食い、死骸はまた海底土に帰るので、減らないという。福島近海から茨城、千葉への南方向の海底にはホットスポットが生じ、銚子沖の泥には今もセシウムが増えている。湖沼の底土や淡水魚も汚染

されている。東京湾の汚染も深刻だ。河口を中心にホットスポットが生まれている。関東地方の放射能が、雨によって流されてくるからだ。

「除染」の限界も明らかだ。避難者にも居住者にも、不安と不満はつのるばかりだ。しかもまだ日に一七億ベクレルものセシウム等が大気中に放出されている。

活発化する地震 安全対策 気象庁によると、昨年は震度五弱以上の地震が六八回あり、統計史上最多となった。列島各地で地震が活発化しているという。

こんな状況の中で、原子力マフィアは停止原発の再稼働を図っている。大地震の問題を過小評価し、設計と対策を過大評価することによって。

しかしかねてから原子炉と配管の溶接部等の応力腐食割れや、水素脆化や、冷却水再循環系など配管の亀裂や、要所配管の減肉などを知っているものなら誰でも、福島では大地震そのものによる破損があったのではないかと考える。

加圧水型（関電、北海電、四電、九電、原電敦賀二）では、中性子脆化が予想以上に速いという欠陥が加わる。地震時などに緊急炉心冷却装置が作動して、冷たい（常温）の水が注入され、高温・高圧で運転されている圧力容器内面が急冷されると、破裂する恐れが生まれる。圧力容器が破裂しては、格納容器もひとたまりもない。

しかも今日の原発の耐震設計がいかに不十分であるかは、多くの識者や、本誌一一〇号でも今は亡き芳川廣一さんが指摘しているとおりである。

新しいからといっても油断できない。大型化と経費節減合理化とで、かえって危険性を増しているものが多い。要所にすでに劣化が進んだり、歪（ひずみ）が大きくなっていくものも多いし、発生したひび割れが見過ごされているものも少なくない。次の衝撃によって、福島の悲劇を繰り返す恐れが大きいのだ。

ストレステスト・安全評価は、マフィアの国際機関 IAEA まで活用して、関西の大親分の大飯と四国の親分の伊方を手始めに合格とされ、再稼働が推進されそうである。ここも近接する三本の活断層と中央構造線によって大地震の起るところだ。

マフィアと支配集団 これを機に、設計時は二〇年（税制上は一五年）を想定していたはずの耐用年数も四〇年に延長され、さらには糊塗策をもった申請次第で、六〇年にも延長されようとしている。

巨大な設備投資に絡んで、独占資本と、幹部官僚と、自民・民主など保守政治家との関係に司法や御用学者や報道機関や御用組合なども組み込まれて、マフィアのごとく支配集団ができていくこと、彼らは人の生命よりも大資本の利潤の上に置くことが、福島の事故によって白日の下にさらされた。しかも福島原発や、稼働を続ければさらなる大事故を起こしかねない原発を地震列島に林立させてしまった責任者たちは、過去からの経営者も幹部官僚も大臣や政治家も何の処罰をうけることはないままだ。

オリンパスの旧経営陣ら七人が逮捕された。財テクに失敗した損失を隠し続けた事件である。だが心ある人びとの幾十年来の反対も押し切って、原発を強行してきたために、いま多くの生命と健康と仕事を奪い、家族と人間らしい生活と食品の安全を破壊している東電や東芝や日立等の歴代経営者等は、逮捕にも値しないのだろうか。

それどころか東電は「原発から飛び散った放射性廃棄物は東電の所有物ではない。無主物であって、東電は除染に責任を持たない。」と主張してゴルフ場の除染を逃れ、東京地裁もこれを認めた。

発生者責任はないというのだから、どんなに高いレベルの放射性廃棄物にも責任はなく、各種の汚染物を東電の第一、第二の広い敷地に引き取ろうともしないばかりか、メルトスルーした核燃料まで、県外に処分しようとする。国の責任で血税を使つて。

今日の国家とは、独占資本の階級支配の機関であることがだれにも分りやすくなっている。四月に作られる原子力規制庁も、マフィアの恥部を隠すイチジクの葉にしかなるまい。

原発なくても電気は大丈夫 原発抜きで、火力と水力だけで間に合うことはすでに十分実証された。かくも原発の比率が高くなつてしまつても、原発はすぐに全面的・永久的に休・廃止できるのだ。

火力を優先稼働しさえすれば原発は全く不要であることは、この四〇年間、原発容認派との論争で言い続けてきたことである。世界に立ち遅れた風力など自然エネルギーを急速に拡充するべきは論を待たないが、原発の代替は火力の拡充でよいのだ。

地球温暖化の主因は太陽活動の変化にあり、二酸化炭素などは副次的原因と思われる。しかし新增設は当面LNG火力を中心にすべきという主張は、軌道修正すべきかもしれない。週刊『新社会』三月六日号に紹介したように、「ミニ氷河期」に入りつつあるとみられるからだ。その被害を減少させるためには、二酸化炭素の排出を多くした方がよいという見方が成り立つ。LNGよりも石炭の方が良いということになる。オーストラリアやカナダ等からの輸入は、ウランを即刻やめて、石炭の増量に切り替えるべきだ。(これはホルムズ海峡とも無縁だ)

風力発電は有望 風力発電の音波公害の解消はさほど困難なことではない。

北海道等である程度の規模になろうとしているが、問題は北電等の電力会社にある。「再生可能エネルギー特別措置法」は七月に施工されるが、送配電網を独占する十電力会社の多くは、風力発電の買取りに上限を設け、風力の拡大を抑えている。北電などは風力事業者側に、需要に合わせて出力調整のできる風車の設置を義務付けた。

風力の変動は、本当は電力会社間で融通すれば十分吸収できる。電力会社側こそが火力での負荷追従運転で対応することでも、さらには揚水式発電を活用することでも、大規模な蓄電装置をおくことによつても、風力の買取りや発電をいくらでも伸ばすことができる。電源開発（Jパワー）は大間のMOX専焼炉建設を即刻中止して火力に改造するとともに、要所に洋上風力発電基地を造るべきだ。

なお九州大学応用力学研究所が開発中の「風レンズ風車」は大いに有望にみえる。十電力の少なくともその送配電網を国と自治体の共有物にして、民衆と脱原発と自然エネルギーのために拡充・整備する必要も増している。労働組合が原子力マフィアから自らを解放することが必要になつている。マフィアの親分たち電力・電機・重工等の独占資本を孤立化させる闘いを強化しよう。(原野人)

東海第二原発廃炉めざして

―「3・11」から一年のたたかい―

危機一髪 東海第二 福島第一原発の震災について、私が一番がく然としたのは、定期検査で原子炉が停止中の4号機でも、使用済み核燃料貯蔵プールの燃料棒が冷却不能のため損傷し、爆発して建屋を損壊したことである。

東海第二原発から2キロ圏内に住んでいる身として、今までの地震の時には点検中と報告があるとホッと胸をなで下ろしていたのだが、これがとんでもない浅はかな考えであったことが証明されてしまった。この程度の知識で反対運動と称していた結果としてこの地震国日本に五四基もの魔物を住まわせてしまったとの思いである。

地震・津波で呆然とするような壊滅的被害を受けた被災地は、復旧・復興までに長い年月と困難を要することはもちろんだが、原発震災の被災地は遺体の捜索や瓦れきもそのまま、いつ自宅に戻れるか見通しも立たず途方にくれている。

東海第二原発も3・11の地震により原子炉は自動停止、後に外部電源が喪失、三台の非常用ディーゼル発電機が起動したが、一時間後に到来した津波により一台が停止。残り二台で辛うじて冷却できたという。正常に復帰したのは一四日で、やっと外部電源が回復したからだったという綱渡り状態だったと後でわかった。怖い話である。

もう少し津波が高かったら、もし満潮時に重なっていたら、福島第一原発と同じ事になっていた。福島の人たちの苦労・苦悩はとも他人事とは思えない。二〇km圏内に七〇万人、三〇kmに一〇〇万人はどうするか、首都東京に二〇〇kmという近さだ、さらに運転開始から三三年の老朽原発でもある。様々な事が頭をよぎった。

空気も水も海もコミュニティも仕事も、人間の生存の全てを奪い尽くす原子力発電は止めさせなくてはならない。声を大にして訴えようと、みんなで話し合った。

七団体合同で申し入れ 二〇一一年四月一四日、日本原電、日本原子力機構、茨城県に対して七団体合同での申し入れをした。

日本原電に対しては東海第二原発での今回の情報を迅速かつ詳細に報告すること、プルサーマル導入計画を放棄し運転再開を断念すること。日本原子力機構に対しては再処理や高速増殖炉の開発事業をとりやめること。両事業者共通として、今度の巨大地震・津波・噴火等の災害に対して、未来永劫にわたって放射性物質の厳重管理の措置を講ずること。県に対しては、大気や海などへの放射能の流出、排出の防止、一刻も早い収束、被害者への十分な補償を東京電力と国に強く求めること、などである。

廃炉署名を開始 二〇一一年一〇月二日、「放射能汚染を許すな！ 原発いらぬ！ JCO臨界事故12周年集会」が水戸市内で開かれた。参加した約五〇〇人は、終了後にJR水戸駅まで約一キロをデモ行進し、「臨界事故を忘れない」「原発はいらない」とシュプレヒコールを上げ、沿道の市民に訴えた。

二人の労働者が亡くなり、六〇〇人を超す人々が被ばく、三〇万人が屋内退避した放射能事故。一九九九年九月三〇日のJOC臨界事故は今だ記憶に生々しい。この臨

界事故でPTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症させ、既往の皮膚病を悪化させた現場近くで自動車部品工場を営む大泉さん夫妻が、JCOと親会社の住友金属鉱山を訴えた裁判で最高裁の「門前払い」極めて不当で認めたい決定も忘れられない。

集会は原水禁などが主催し、茨城平和擁護県民会議の川口玉留会長は、「東海第二原発の運転再開を認めるわけにはいかない」と挨拶、東海第二原発の廃炉を実現する闘い「東海第二廃炉署名」の成功を訴えた。

福島の双葉地方原発反対同盟代表の石丸小四郎さんが、避難生活の現状報告やこれからの決意を語り、「脱原発東北電力株主の会」代表の篠原弘典さんが女川原発の現状について、茨城県東海村議の相沢一正さんが東海第二原発廃炉に向けた闘いの課題等について報告した。さらに、福島原発事故以来、国の原子力政策を厳しく批判している東海村の村上達也村長からメッセージも寄せられた。

“**猛毒**”**再処理施設** 東海村には原発以上に危険な施設がある。原子力機構の再処理工場である。“猛毒”の高レベル放射性廃液が393立方メートル（六ヶ所村再処理工場にある廃液の約2倍量）が保管されている。ここ二年ほどはこの廃液をガラス固化体にする作業も中断されているという。この再処理工場でも外部電源喪失二日間、断水は四日間も続いたため、自家発電と貯水場の水の節約利用でこれらを冷却した。

地盤や路面の陥没、地割れ、建物や機器の損傷、大型クレーンの落下、排気筒上部倒壊なども発生、ホームページもダウンし情報把握ができなくなった。もっと大きな地震や津波で原発と再処理工場が同時に冷却不能に陥ったらと、考えると恐ろしい。一九七七年「核再処理工場の重大事故、国民の半数死亡も西独報告書が波紋」と新聞報道されている。これは独政府委託調査報告書で、これによれば工場で冷却施設が完全に停止すると、爆発によって周囲一〇〇kmの範囲で即死、最終的に人口の半数死亡の可能性があると驚くべき内容である。

高レベル廃液を液体のまま存在させているリスクがどれほど大きいか、早急にガラス固化し危険な再処理からも原発からも撤退することが、人類存続の絶対条件である。昨年一月二十九日、これらの問題の質問状を日本原子力研究開発機構に提出した。年末、その回答を得たが、さらに問題が露わになったのである（本誌一一二二号）。

相沢一正さん当選 茨城県東海村村議会議員選挙の投票票が一月二二日に行われ、東海第二原発の再稼働中止と廃炉を求める署名活動の中心を担っている相沢一正さんが三期目に挑戦し、一〇四〇票得て第四位の上位当選を果たした。定数二〇に二一名が立候補。投票率は前回より七・五ポイント低く過去最低の五九・五一%。村上達也村長が「脱原発」を宣言したなかでの村議選。過半数以上を占める推進派候補者も、さすがに今の時期に「推進」とは言えず、原発に関してはだんまりを決め込んだ。

そのなかで、相沢候補は告示後の五日間、辻立ち中心に東海第二原発廃炉と村上村長の「脱原発」表明を支持することの二点にしぼり訴え続けた。とくに隣の那珂市に住む福島県出身の女性が、今福島で起きていることや知り合いの実態などに沁みる応援演説をして、その相乗効果で人の心をつかんだ。何としても相沢候補を上位当選

させなくてはとの思いで多くの人が駆けつけ、盛り上がった。

なかでも女性は思い思いに料理を持参し、期間中に誕生日を迎えた候補者に手作りのケーキを用意、自由な発想とアイデア、気配りのパワーを発揮。相沢候補は昨夏から一二月半ばまで自転車で村内を一軒一軒回り、署名を集めた。その集大成としての選挙。しかし、上位三人が電機労連や原子力機構からの候補者。闘いはこれからだ。

署名提出 第二次集約分は今年二月一〇日に5万1310筆を提出した。昨年一月八日第一次提出分5万1435筆を合わせると、署名数は10万の万台にのった。

一次二次とも一九団体約六〇人が立ち会い、橋本昌知事に署名簿を手渡そうとしたが「日程調整がつかない」と、危機管理監と原子力安全対策課長が代理の対応となった。

県知事は一月二五日に枝野経産相と会談し、現在、定期検査中の東海第二原子力発電所の再稼働について、半径三〇キロメートル圏内に一〇〇万人が住んでいることや、運転開始から三四年目に入っていることなどを十分勘案した上で慎重な対応を取るよう求めたことが報ぜられたので、私たちの意向が伝わったかと期待もしたが、やっぱり「国の方針が示されていない」と繰り返すばかりだった。

「国の姿勢を待つのでなく、県としての対処方法を考え、国に提案するよう臨むべきだ」「子ども達の健康調査を実施すべき」と強く求めたが、これについてのコメントはなかった。三月末の第三次集約の取組みを進めている。

廃炉求め「人間の鎖」 二月二六日、原電正門前で県内外から駆け付けた約七〇〇人による「人間の鎖」が作り上げられた。主催の茨城平和擁護県民会議関係者に加え、ツイッターなどで情報を得て参加した若者の姿もあり、廃炉を目指す動きは、着実にすそ野を広げつつある。

「原電は断固として再稼働に歩もうとしている。圧倒的な再稼働反対、廃炉の動きを作り出していこう」と、「東海第二原発ハイロアクション」実行委員長の相沢一正さんが呼び掛けると、会場は熱気に包まれた。行動終了後、近隣地域の参加者たちは近くの会場に集まり、情報交換や各団体の連携を深めた。村上達也東海村長も飛び入り参加。村長は人間の鎖について「勇気付けられた。若い母親の動きが大きいうねりになっていくし、原子力政策を変える力になると思っっている」と語っていた。

若いお母さん達にも動き 三月の東海村議会にむけて動きも出てきた。待ちに待った若いお母さん達の動きである。近隣の市では福島第一原発の事故に対して、若いお母さん達の動きやグループ化がおきているが、東海村の中ではなかなか動きがなくて、この村の中ではやはり難しいのかなと思っっていたが、やっと動く人ができて相沢議員の所に集まったのである。

話し合いの中で請願が通りやすいようにとりあえず「東海第二原発の再稼働中止」を求める請願にしようと思っ統一し、請願者として名前を出せる人を探したり、紹介議員になってもらえるか各議員に当たったりと動きはとても早く、頼もしい限りである。この請願がすんなり通るとは思わないが、結果はともかく、新たな動きに注目した後押ししていきたいと思う。

(茨城県東海村・川野 弘子)

沖縄でも「3・11」にシンポ

ーオキナワだより⑤ー

ハイサーイ！ やつと学年末試験も終わったよ。でもなんか一年が、しに(超)早いやさ。「調子にのるな！」て怒られそうだけど、今回も「ウチナーヤマトグチ」でいつてみようね！

うれしい出会い うれしかった話からいくよ！ 先週(一・一八〜二〇)広島と山口で開かれた憲法関係の市民運動全国交流集會に出かけたわけさ。フィールドワークでは、中国電力上関原発の建設予定地(現在工事中)や祝島にも上陸できたし、普天間海兵隊部隊の一部移転が打診された岩国基地も身近に見学することができた。

特に印象に残ったのは岩国基地。戦闘機の騒音対策で滑走路を1km沖合に移設して基地面積は一・四倍になり、そこに厚木や普天間からの米軍の移転、さらに自衛隊も加わって完全に戦闘機・軍用機のオンパレードやさ。埋立土砂は市内丘陵地を崩して調達、崩した丘陵地はまちづくりのための種地とするはずが、立ち行かなくなつて国に売却、国はそこに米軍住宅を建てることにしたつていうさね。市の財政は、基地の交付金なしには立ち行かないように、がんじがらめにされてる。

上関や岩国のことは機会をみて改めて報告したいけど、うれしかった話というのは、この時の懇親会で、たまたま同席した茨城から参加のTさんのことさね。岩手出身と聞いて、「岩泉町を知ってますか」つて聞いたわけ。前回ちよつと書いたけど、わん(私)は二〇歳の時に岩泉町の冬季分校(夏節(なつぶし)冬季分校)で代用教員をしてたからね。そしたらTさんは岩泉町の別の分校(三田貝(みたがい)分校)で教員をしてたつていうさね。しに(超)びっくりやさ。

わんにとつては、二〇歳の時の冬季分校での憲法体験(「たより」前号に報告)がなかったら、この交流集會への参加もなかったわけで、憲法九条や二五条が出会いをつくつてくれたつて、心からうれしく思ったわけさ。

消せないメール あれからもう少しで一年。わんには、「3・11」にかかわつてどうしても消せずに保存してる携帯メールがあるさね。

ひとつは、当日の家族との安否確認メール。わんは沖縄に来る直前で、この日は東京の千代田区にいて完全に帰宅難民やさ。携帯メールだけは何とか届くらしいつて聞いて、何度もトライして、それでも最後に長男夫婦の無事が確認できたのは、夜の九時過ぎやつた。

もうひとつは、岩泉の当時の分校の子どもたちからのメール。夏節部落は山間地のためともと携帯は圏外、インターネットも繋がらんさね。津波の到達はないと思つていたけど、豪雪の雪下ろしができていない家が多く地震に耐えられたか、また、宮古や小本など沿岸部に仕事や病院通いしてる人も多くいて、心配したわけさ。市街地に住み、町役場に勤めるSさんからの第一報が以下のメールやさ。

「海岸線は壊滅状態です。一二日夜半から停電は解消しましたが電話も携帯も不通で

す。私達職員ほか、避難民対応など交代で対応しています。まだ余震も続いているので、安心できません。平塚市にいる娘達の無事は確認しました。先生方もお気を付けてお過ごしください。」(二〇一・三・一四)

今年の初めには、次のように近況を知らせてきてくれた。

「:(被災地域の)小中学校は、応急仮設校舎を大牛内分校に建設中です。今月半ばには引越して、三学期からそちらで勉強します。ようやく落ち着いて勉強できます。これで終わりではないので、私たちが抜かず努めたいと思っています。」(二〇一・二・一・六)

前述の「市民運動全国交流集会」で講演した一橋大学名誉教授で「九条の会」事務局の渡辺治さんは、講演を次のように結んでる。

「私たちは、〃八・六〃(集会は広島で開催)を国民的記憶の日としてきたことで憲法を守ってきた。〃3・11〃を国民的記憶の日にする事ができるか。〃3・11〃が、新自由主義の再起動の出発点になるか、それとも新自由主義に訣別し福祉型地域と社会づくりの第一歩になるか、それは私たちの世代の次の世代に対する責任だろう。」
あらためて沖縄にとつての「3・11」とは何かについても、考えなければ思いうわけさね。

「場所の力」三月一日には、福島県郡山市での県民集会をはじめ、各地で「地震と原発」をめぐって多彩な取り組みが企画されてる。沖縄でも、福島から県内に避難してる人たちが中心になって、「みんな集まっぺ！なんくるないさー」を準備中だし、沖縄大学では「シンポジウム 3・11原発震災一周年にあたってーチェルノブイリ、福島、浜岡、そして沖縄ー」が開催される。

作家の大江健三郎さんの呼びかけた「さよなら原発一〇〇万人アクション」による一〇〇〇万署名も、七・一六東京代々木公園での一〇万人集会に向けて取り組みが続いている。先月、山梨に住む姉からは、二八六筆の署名が集まったって電話があったさね。でーじ頑張ってる。

署名っていえば、前記「交流集会」会場に向かう途中、原爆ドームの前で「高校生一万人署名運動」の高校生たちが核廃絶の署名を呼びかけてた。手が震えてうまく書けなかった、って女子高生の前で、はちかさーしてた(はずかしがってた)わけではないよ。何しろ寒かったさね、広島空港は雪だったからね。話が完全に脱線してるあなたに(でしようが)。毎年集まった署名は、高校生平和大使が国連に届けてる。長崎からはじまって全国の高校にも広がっているっていうさ。つい最近も岩手で実行委員会が発足したって、小さく新聞に出てた。

渡辺治さんの講演のように、〃八・六〃と〃八・九〃の記憶は確かにヒロシマ・ナガサキという「場所の力」につながっていると思う。オキナワもこの点では負けてないって思うけどや。「3・11」の記憶が、福島や東北の持つ「場所の力」へと結実していったほしいって、心から思うね。

話は原発に戻るけど、現在運転中は、東京電力柏崎刈羽六号と北海道電力泊三号のたった二基やさ。それも三月と四月に定期検査に入るから、四月末にはすべての原発

が停まる。

「3・11」を中心に全国で広がる一つひとつの自主的取り組みが、停止原発の再稼働を許さない世論を形成していくことを期待したい。

最後に、身内になるけどカミさんの短歌から、「3・11」関連のものを三首紹介して終わりにするね。
(毛利孝雄)

*がれき山かき分け妻を捜しゆくどこまでもゆく漁師のありて

*慰霊祭父の遺影を抱き締める幼子の在り母の膝には

*公園に余地なく人の集まりて脱原発の旗たなびかす

毛利 孝雄 代

賞味期限切れはごく間近

―橋下君と日本政治(二)―

ある勉強会で橋下大阪市長について、①彼はどのようなようにして一躍「時の人」になったのか、②彼はなにを主張しているの、③主張に新しさあるの、④知事の四年間でなにやったの、⑤いまなにをやるうとしてしているの、⑥どんな人たちが橋下君を支えているの、⑦「人気」はいつまで続くかとの原則的かつ単純な質問がありました。さらに、もし橋下さんが「天下を取る」ようなことになれば、憲法改悪の条件は一挙につくられてしまえますよね、とも。

橋下さんは弁護士としてTVタレントというようにまさに法律という専門的知識、TV出演が教え込んだであろうしゃべくりといわれる庶民の心情をもてあそぶ技術を本能的に会得した典型的なルンペン政治家です。

橋下という人をはじめて知った時、ひよつとすると彼は「大物」になるかもとの不安を覚えましたが。たとえば、彼が最大の売りにする「大阪都構想」は、日本経団連が旗を振り政治家を誘導したいとする古くからの道州制、それを地域型に改編し、PHP総合研究所社長江口克彦が出版した「地域主権型道州制―日本の新しい『国のかたち』」(PHP新書)の大阪版にすぎません。道州制は地域分権あるいは地域主権の上に組み立てられていることは、だれもが知っていることです。「分権」と「主権」は言葉が違うように内容も違ってくる。主権の方が国家からの「独立性」が強い特徴をもつかのようです。

橋下君は「大阪都」を構想するにあたり次のようにしゃべっています。

「知事に就任した直後の記者会見で、『大阪から国を変えろと言わないんですか』と訊かれました。その後も同じ質問を何度か受けましたが、僕はそれを言葉にするつもりはありませんでした。

体制(彼のいう体制とはたんなる統治技術とあり方にすぎません・筆者)を変えようと思ったから政治力が必要です。選挙に勝っただけで知事として何の実績もなく実力も未知数な若づくりが、国にも申すとか、国を変えますなど大言壮語しても、空回りするだけです。まずやるべきことをやって、皆が納得する結果を出してから、次に進もう、と思っていました。」(『体制維持―大阪都』文春新書、六四頁)。

と、若い「政治家」にしては組織と政治のことを少しは知っているなど思われたからでもありました。しかし、「政治は直感、勘、庶民感覚」(一二四頁)、「弁護士時代、社外取締役等で企業経営に関わった経験は、知事にとつてとてもなく役立ちました」(一一〇頁)、「僕は、仕組みを変えるときは、一点突破の全面展開を考えます」(七五頁)との自慢話に、橋下はしよせんタレント政治家ですぐに消えていくと思うようになりました。

だってそうでしょう、橋下君は「大阪都構想」でなにか結果出しましたか。「元氣な大阪をつくるんだ」とおしゃべりするだけで市長に当選し、だらしな二つの保守党、宗教政党が橋下にすり寄っているだけなのです。有頂天になって広げた大風呂敷からは極右反動、てっぺんした自由競争論者、地方自治体行政に経営の論理をこれまたてっぺんしたいとの思惑がすけて見えてきているからでもあります。

(つづき)

国鉄闘争総括の視点求めて

―新潟・山形「奥の細道」の旅―

悩みそして再会 二〇一一年六月から二〇一二年二月にかけて四国（四県）、東京（二回）、関西（一府二県）、新潟（二回）、山形と各地の仲間に会いに行きました。それぞれ二年く七年ぶりに会う顔でした。皆さん温かく迎えてくださり、懐かしさもあって一定の昔話はできたのですが、国鉄闘争の総括と今後の展開については、私自身が明確ではないために漠然としたものとなりました。しかし、再会の中にたくさんの「ヒント」もありました。

さらに、この間に私の地元にも何人かの闘争団（原告団）や共闘の仲間も訪ねてきてくれました。ここでは、当事者同士としてお互い踏み込んだ議論も展開されましたが、誰もが自らの進路に思い悩んでいることが明確になりました。

交流の中で、私がつだけ確信を持ったことは、絶えず大衆の中で連帯すべき闘いを見出し、そこに連帯し労働者として存在し続けなければ、私たちの経験など活かされはしないということです。

こうした交流のなかで、それぞれ思いはありますが、最後に伺った新潟と山形の仲間との交流について少し紹介させていただきます。

豪雪の新潟へ 二〇一二年は、日本列島を「大寒波」が覆い尽くしました。とりわけ東北地方は、連日「記録的豪雪」とマスコミで報道され、積雪が3m〜4mとなり各地で交通が途絶え、雪おろし中の事故が多発するということでした。九州でも雪は振ります。私たちの「大雪」という感覚は、積雪5cm〜10cmということですので、東北地方の状況は想像もできません。

その記録的な大雪が降り続く真つただ中、本年二月三日〜六日にかけて新潟と山形を訪ねました。私自身「真冬の東北に行つてみたい」という思いもあり、昨年六月に新潟市議会議員の小林義昭さんを訪ねた際と、同年一月に小林さんと本誌発行人の滝野忠さんが来県した折に冗談交じりに話したことが現実となりました。二日に東京に着いた私たち夫婦は、滝野さん夫婦にお世話になり、いろんな想いを語り合いました。

今回の「豪雪東北の旅」には、私のわがままを二四年間許してくれた妻の慰労も兼ねて滝野さんにも同行いただきました。東京から新幹線で新潟に向かう車窓の景色は、高崎あたりまでは大した雪もなく平凡な眺めでした。それが越後湯沢の長いトンネルを抜けたあたりから一変し一面の銀世界となり、まさに川端康成の小説「雪国」の世界です。

長岡駅で下車した私たちは、除雪された雪の壁に驚きつつ迎えに来てくれた小林さんと、その日に泊まる予定であった古民家に向かいました。市内から走ることで二時間程度の道のりでしたが、進むにつれて雪の壁はどんどんと高くなりました。車中で小林さんの生まれ故郷でもある柏崎市高柳町の宿泊予定の古民家は「避難勧告」が出さ

れキャンセルになったことを聞かされてきました。私の好奇心を配慮してか、その宿がどんな状況か見物に行ってみようということになりました。

小林さんに言われるまでもなく「宿泊不能」なことは、道中の積雪に埋もれてかろうじて民家であることが判別できる景色をみれば明らかでした。「ここがその宿だよ」といわれた古民家は、どこが入り口でどんな建物なのかも判別できず屋根の頭だけがわずかに見える程度であり積雪量は4mということでした。

お世話いただく予定であった地域の皆さんは、それぞれ自宅の出入りができるように、と老若男女総出で雪下ろしに没頭されていました。こんな時に「雪が見たい」などと観光気分でやってきた私たちは、「迷惑千万」な存在であっただろうと申し訳ない気持ちになりました。一行は、近くにある大型観光施設「じよんのびの宿」に宿泊することとなりました。

勉強会 冬の雪国の厳しさに圧倒された私たち夫婦でしたが、共闘の皆さんと六名の勉強会を開き、国鉄闘争について語り合いました。二四年間闘えた事実と終結内容に対して、それぞれの意見を交え二時間程度の勉強会でした。ここでも「これから先をどうするのか」という点に議論は絞られました。私自身に明確な答えがないために、「課題」として残されることになりました。

勉強会に出席いただいた佐藤さんから頂いた「赤峰さん自身が答え出さなければ何と始まらない」という言葉を私たち夫婦は重く受け止めました。

山形へ全線不通 新潟の皆さんには二日間お世話になり、滝野さんともそこで別れた私たち夫婦は、山形県に住居を移した国労OBの山田則雄さんを訪ねました。滝野・小林両氏から「山田さんの所は、この時期に行く所ではない。雪も新潟の比ではなく凍死覚悟で行くなら良いけど」とさんざん脅されていました。そう聞くと行きたくないのが私の性格ですが、妻は不安にかられたようでした。

山田さんの家は、最上川の上流、宮城県との県境にあります。新潟から羽越線で余目駅まで行き陸羽西線で新庄乗り換え、陸羽東線で境田駅に降りれば、駅前が山田さんの家であると聞いていました。元駅員の私としては、行程は四時間程度の簡単な旅であり妻の不安をよそに車窓の景色を楽しみながら、「確かに新潟よりも雪が深いな」と感心していたところ、車内放送で「豪雪のため余目駅から全線不通」の一報が流されました。滝野さんたちのいったとおりになり夫婦で愕然としました。

山田さん 私は、山田さんに「今回は無理なようなので新潟まで戻り、東京に宿を探します」と電話を入れたところ、余目駅まで車で迎えに行くので絶対待っているようにと強くいわれました。私たち夫婦は、鉄道が不通のこの状況で車が走れるのか、山田さんに無理をさせ「何かあったら」とさらに不安が募りました。

余目駅の近辺は、どこでも見られる閑散とした寂れた街の景色でした。待つこと数時間、白い軽乗用車に乗った大きな山田さんが現れました。七年ぶりに再会した喜びよりも「迷惑をかけた」という思いが強く恐縮する私たち夫婦を、山田さんは豪快な

笑いで明るく迎え入れてくれました。

さっそく、車に乗り込み観光しながら帰路に着くことになりました。蔵王、鳥海、西吾妻や出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）など山形の名峰の説明を受けながら、一〇〇年前に土地の大富豪が建てたという酒田市にある山居倉庫や魚市場を見学し、最上川沿いに山田さん宅へ向かいました。道中で山田さんより、自宅は豪雪よりも寒気によってボイラーや水道が凍結しトイレも使えず宿泊不能であり、親戚の旅館赤倉温泉「三之亟」（さんのじょう）に宿をとったと聞かされました。ここでも新潟同様の経験をするようになりました。

二階の窓から すっぼりと雪に埋まった山田さんの自宅に着いた私たち夫婦は、二階の「窓」から案内されました。山形に移り生活を始めた山田さんが、居酒屋をはじめ、炭を焼いたり野菜を作ったり悪戦苦闘の生活を豪快な性格で楽しんでいる姿に感服した次第です。現在は、芭蕉の句で有名な「母なる最上川」の上流にダムを建設しようとしている国・県・町に対して、反対運動の先頭に立ち抗議や署名運動を取り組んでおられるということです。

宿の「三之亟」は、日本百名湯に紹介された宿で江戸初期の開業で創業約四〇〇年、現オーナーが一七代目に当る老舗旅館です。宿泊客は私たち夫婦だけであり、雪深い東北を満喫したい私たち夫婦は、思いもよらない至福の時を過ごさせていただきました。

新潟、山形の旅で私に芽生えたものは、雪に埋もれながらも「冬眠」もせずに生き続け、闘い続ける仲間の姿から、「私が冬眠してはならない」、「私も闘い続けなければならぬ」という感情でした。ものすごい勢いで衰退していく「労働運動」や「民主化運動」と比例して政治や企業の横暴は止まるところを知りません。その現実にしつかりと向き合い「何とか世の中を変えたい」と本当に闘っている人たちに連帯することによって自身を取り戻す「何か」を探せそうな旅でした。

本誌、発行人の滝野忠さんをはじめみなさんには、このような私をはじめ全国の闘争団の行く末を心配し激励し続けてくれることに改めて感謝する次第です。

（赤峰 正俊）

◇ 投稿 ◇ 反原発活動家・芳川廣一さん逝く

一月二二日、山形市在住の元柏崎市議会議員（六期）・柏崎原発反対同盟元代表・芳川廣一さんが亡くなられた。「社会通信」で芳川さんの原発記事を見て、電話を入れたのが最後となった。

東電は、一九六九年に柏崎市に原発建設を発表した（七基・八〇〇KW）。芳川さんは、「原発はクリーンエネルギー」「夢のエネルギー」と言われていた中で、最初から危険性を訴えていた。

社会党も「原子力の平和利用は、安全性が確保されれば認める」と原発を容認しており、一九七一年の三五回大会で「建設反対運動を推進するための決議」でようやく反原発方針が確立された（その後、九四年の村山首相の下で稼働中の原発容認）。また、七〇年代後半に東電福島第二原発（と思われるが）の公開ヒヤリングが開かれることになり、柏崎からバス二台で阻止行動に出かけた。

芳川さんは、一地方の活動家であったが、中央や福島に出かけ、社会党の反原発への方針確立や公開ヒヤリング阻止などを働きかけた。今日の原発事故を見据え、社会党の反原発の方針確立に大きな役割を果たした。その後、柏崎の先進的な活動を担い、巻町で日本初の住民投票で原発反対が

過半数を占め、東北電力に巻原発を断念させた。芳川さんは、原発の話になると夜遅くまで熱く語られ、いくつになっても若いままだった。芳川さんや大先輩の田辺栄作さんも旅立たれ、時代の流れを感じる。原発を廃炉に追い込み、社会運動、労働運動がよみがえったと報告できる日を実現したいものである。(新潟市議会議員・小林義昭)

◇ 読者からのおたより ◇

残念 誌代送金、残金カンパです。第一一四号一三頁、心残り「ボケ老人、まさに気狂いざとはこのことです」の表現は、人間を否定しているみたいで内容を理解するよりも、いやな気持ちになります。介護の仕事をしているので少しナイーブになっているのかもです。(東大阪市・J) 編集部より 文章あつかうのたいへん。内容を見ていただければ分かると思って使ったりするのです。ずっと前にも同じお叱りも。これから用心します。

元気で その後元気でやっておりますが、二ヶ月に一回CTで造影剤をされて検査を行っています。東日本大震災から一年たちましたが、政府・東電・自治体の「しがらみ」のなかで改善が進んでいない状態にあります。「さよなら原発! 3・11北九州集会」が開催されます。区の実行委員会を取り扱いを行っています。ともにがんばりましょう。(北九州市・I) 編集部より おたよりに感謝です。連れ合いは、三ヶ月おきにCT検査十五年を経た頃、検査時にチアノーゼ(酸欠・身体青紫)、それ以来医師の指示は血液検査三ヶ月に一回、MRI検査(磁気共鳴画像診断装置)年一回。検査前後は一喜一憂しますよね。さらなるご回復を祈ります。

春闘学習会 練馬区報の案内で、春闘学習会が二月に三回開かれ、講師は全労協議長の金澤壽さん、「地域経済の活性化に必要な方法や社会保障と税の一体改革などについて学ぶ」とありました。三回とも申し込みました。どんな話が聞けるか楽しみです。(東京・練馬・J) 編集部より 金澤さんは古くからの友人、優しく、きびしく、人間性豊かなお人。「楽しい」と思いますよ。感想・報告など寄せていただければ嬉しいな。

田島さん 田島省三さん残念。これからの人生が待っていただけに。(北海道上川町議・あべ逸雄) 編集部より 俳句もつと詠み、勉強できたでしょうにね。あべ逸雄さんは国労出身の議員さん。

サツマと、山下けいきさんへ 南洲さんは「人をとがめず…」と述べていますが、貴兄も僕も、まだ修行不足なのか、どうしても「敵」をとがめてしまいます。それから昭和維新という維新もありましたね(1936・2・26)。皇道派によるまさに「善意」からのクーデタ未遂事件でしたが、皮肉にも軍部(統制派)の暴走へのキツカケになってしまった。善意からでさえ「地獄」(敗戦)を生み出すということ。ロシア革命からスターリニズムそして崩壊へ。歴史のパラドックス、おお怖ッ。大阪イシン、平成イシン：肩ツバでごわすヨ、あつまた咎めた：(茨城・H) 編集部より 山下さん、「維新の会」を止めるべく、茨木(大阪府)市長選に立候補。こちらが本場の「維新」です。

国鉄闘争支援四国共闘会議合宿 一二月一〇日(土)〜一一日(日)、高知市で毎年恒例の四国共闘会議の合宿。例年、合宿では一年の活動報告、各県の取り組み等を報告して、ゲストの方に講演。各県の方々の親睦と交流。「国鉄闘争センター四国」発足を決める大事な総会。(徳島・N) 編集部より 二日間、四国の仲間の質の高い論議に身が引き締まりました。なお、徳島では「国鉄闘争センター徳島」として継続することを決定。中野氏は一月二七日から二月一六日まで「国

会前一〇四七キロマラソン行動」を展開。

混迷 政局はまったく不透明。どうころぶか分かりませんが、一時言われていた六月解散をする力は野田にはないのではないか、九月総裁選挙、また代り映えのしない「新しい顔」で選挙ではないかという説も有力。大阪市の組合員「アンケート」は選挙へのかかわりも含めてすさまじいもののようにです。組合としての対応は表には出せないということなのか、音なしの構えでいく以外ないということなのかいまのところ伝わってきません。こうした中で茨木市長選挙(四月一日告示、八日投票)に「山下けいき」さんが立候補を表明しました。たいへんたたかいたくなります。カンパを含めて支援しましょう。(東京・T) 編集部より 大阪の橋下君、少し動きすぎですね。彼の寿命、長くないように思われる。そのた

めにも山下けいきさんに勝つてもらわなくちゃ。